

内在する縄文と弥生の血 菅原道真研究ノート

東 茂 美

一 はつめり

菅原道真（八四五～九〇三）のからだには、燃えあがる炎をおのが手で造形した人びとの、あるいは逆に、装飾をそぎ落とし合理化に徹底した人びとの、そのような相反する血が流れているように思われる。

縄文時代の特徴的な土器は、その口縁部が過剰なまでのアクセサリーで飾られ、まるで大地の裂け目から噴き出た火炎さながらである。縄文時代の早くから口縁部分に突起をもつものが出土し、晩期にいたるまでずっと口縁部の装飾は継承され、波状口縁やら山形突起、はては大型化して彫塑ふうの突起をもつものや、複数の把手とてが複雑に組み合わされたものもある。もはや口縁部の突起が土器全高の半分ほどにもなる、突起というものはばかられるような装飾がほどこされた土器もあって、火焰土器と呼ばれる土器は、こねて造った器が焼かれるときの炎を、焼きあがったあとそのままとつたような装飾で、鑑賞するわたしたちを圧倒する。

一方、弥生時代の土器はたいへんシンプルで、安定と実用上の機能を追求したデザインで造形されている。縄文時代の口縁部の突起はことごとく削ぎおとされ、平坦である。線描絵画が特徴で、鹿や猪などの動物、舟、水鳥、

倉庫、こうしたものが表面をかざっているものの、一面を埋めつくすといった装飾ではなく、文様にしても図案にしても、いたって簡素な描写である。縄文土器をあふれ出る情熱の「装飾美」というなら、弥生土器は日常の機能を重視する「実用美」といべきか。そして、これらをつくりあげた人びとの血が、じつは道真をこの世に誕生させたのだ。

二 埴輪の起源、相撲の起源

姓の「菅原」は、それほど古くはない。道真の曾祖父古人が改姓を願ひ出、桓武天皇にゆるされてからである。もとは土師氏、土器をつくる土師部の人びとをひきいる伴造だった。天応元年（七八一）六月、遠江国の介だった古人が、子の道長ら一四人とともに、「菅原」をもつて姓としたいと申し出ている。すこし引用が長くなるが、『続日本紀』からこのあたりを、しっかりと読んでみよう。

土師の先は天穂比命より出づ。その一四世の孫は名を野見宿祢と曰ふ。昔者、纏向珠城宮に御宇しし垂仁天皇の世には、古風尚存りて葬礼に節無し。凶事有る毎に、例として多く殉埋しき。時に皇后薨して、梓宮庭に在り。帝、群臣を顧み問ひて曰ひしく、「後宮の葬礼、これを為さむこと奈何にせむ」とのたまひき。群臣対へて曰ひしく、「一に倭彦王子の故事に遵ひたまへ」とまつす。時に臣らが遠祖野見宿祢進みて奏して曰ひしく、「臣が愚意の如くは、殉埋の礼は殊に仁政に乖けり。国を益し人を利くる道に非ず」とまつしき。

菅原氏は、天照大御神と須佐之男命が天の安河で契誓をしたときに生れた神がみのひと柱、出雲国造の祖天之菩卑命であるという。後に大國主神の支配する葦原中国を服従させるために派遣されるが、平定に失敗した。

しかし、国をゆずった大国主を祀る祀祭司となった。この天之菩卑の一四世が野見宿祢で、土師氏が代々氏族の誇りとして伝えてきた人物なのだろう。

垂仁天皇の後の日葉酢媛命が亡くなった。そこで葬儀をどのようににしたものかと、群臣に問う。天皇の同母弟倭彦命の葬礼と同じようにすべきでしょうというのが、大方の意見。その葬礼とは、こうだ。『日本書紀』（垂仁天皇二八年）から。

倭彦命を葬る。是に、近習の者を集へて、悉に生けながらにして陵の域に埋め立つ。数日へて死なず、昼夜泣吟つ。遂に死にて爛ち腐り、犬・鳥聚り噉む。天皇、此の泣吟つる声を聞きたまひて、心に悲傷有し
ます。

なんとも惨いありさまである。考古学的には、大量殉死の風習があったとは認められないようで、「其れ古の風と雖も、非良は何ぞ従はむ。今より以後、議りて殉を止めよ」と詔した、漢風諡名「垂仁」にふさわしい創作なのかもしれない。とにかく、倭彦命のとむらいを最後に、殉死が禁止されたのである。

ところが、皇后の「梓宮庭」（殯の宮）にあつて、それにかわる葬礼がまだないことに、天皇は困ってしまったのである。ふたたび『続日本紀』（天応元年）から、古人らの奏上文をつづける。

仍ち土部三百余人を率ゐて、自ら領りて墳を取り、諸の物の象を造りて進りき。帝覽して甚だ悦びたまひて、以て殉人に代へたまひき。号びて墳輪と曰ふ。所謂立物は是なり。

野見宿祢は土部の人びとをしたがえ、自ら墳土を取ってさまざまな物を造り天皇に献上する。天皇はこれをもつて殉死者にかえたというのだ。墳輪は、本来墳墓の境界を目立たせるための標識として立てたのだが、ここでは殉死のかわりに立てたという野見宿祢を顕彰する内容となっている。いにしえの中国では、上半身は人間、下半身

は蛇という伏犠ぶつぎと女媧じよかがせつせと黄土をこねて、この世に人を造つたといわれている。伏犠は別に「庖犠」とも書かれ、これは神や祖先にささげる「いけにえ」を養い、庖厨ほうちゆうで料理するところからいうのだから。いにしえの中国では人間も「いけにえ」にした。野見宿祢はその逆をやつてのけたのである。

人を殉死させる。これも一種の「いけにえ」だろう。それも亡き人の側近たちの命をこっそり奪つただから、これほど道徳的な「仁」(いつくしみ・思いやり)に反する行為はないだろうし、そもそも多人数の殺戮は経済面・生産面からみても損失が大きい。土のかたまりですむのなら、それに越したことはない。なんとも合理的ではないか。

『日本書紀』は、「天皇、厚く野見宿祢の功を賞めたまひ、亦鍛地を賜ひ、即ち土部職に任けたまふ。因りて本姓を改めて土部臣と謂ふ。是、土部連等、天皇の喪葬を主る縁なり」と記されている。野見宿祢の功績がみとめられ、「鍛地」(埴土の出る仕事場)をあたえられ、土師臣と名のようになった。これが天皇の喪葬をつかさどることになった由縁だといっているのである。

古人らは奏上していないが、野見宿祢といえは、埴輪の起源説話とともに「争力」(のちの相撲)の起源に登場する人物である。『日本書紀』垂仁天皇七年七月七日の譚。じつはこの七月七日とは、後代、相撲の節会がおこなわれるようになった月日である。当麻邑たぎまむらに当麻蹶速たぎまのくえははやという力じまんの男がいて、ふだんから「四方よもに求めむに、豈あて我が力に比ぶ者有らむや。何とかも強力者に遇ひて、死生を期はず、頓ひたひるに争力すること得てむ」と、周囲にいっている。それを聞いた垂仁天皇は、全国に蹶速と試合をする者はいないかと、声をかけたのである。

是に野見宿祢、出雲より至りしかば、当麻蹶速と野見宿祢とに拵ちから力せしむ。二人相対ひ立ち、各おの足あしを挙げ相蹶あひくう。則ち当麻蹶速が脇骨を蹶く多折すはり、亦其の腰を踏み折かりて殺す。故、当麻蹶速が地を奪りて、悉いたに

野見宿祢に賜ふ。是を以ちて、其の邑に腰折田有る縁なり。野見宿祢は乃ち留り仕へまつる。

出雲国から野見宿祢がやってくる。ふたりは互に向かい合って立ち、足をあげて蹴りあつた。ほどなく野見宿祢は当麻蹶速のあばら骨を蹴り折つてしまい、そのうえ腰骨を踏み砕いてしまったのである。今日の相撲には土俵があるが、これが設けられるようになったのは、一六世紀くらいかららしい。当時は相手が倒れるまで試合は続行した。「ける」「なぐる」「つく」を禁じ手とし、「なげ」「かけ」「ひねり」「そり」を基本に、相撲四八手を確立したのは、神龜三年（七二六）近江国から朝廷に出仕した志賀清林だといわれている（『相撲相伝』『相撲式』）。清林は「最手」（横綱役）や行司としても活躍した。

相撲の作法がじゅぶん確立した時代ではないにしても、蹴つてあばら骨を折り、腰骨をくだいてしまふ野見宿祢の技は、あまりにも過激ではないか。土の芸術集団のひとりだった野見宿祢は、合理性とともにこうした「過剰性」をもつ存在なのである。

三 道真、文章博士となる

道真の生きざまを思うと、縄文の「過剰性」と彌生の「実用性」とが、ふたつながら内在しているように思われる。たとえば、こうだ。元慶元年（八七七）の人事異動で、三三歳の道真は、文官の任用や典礼をつかさどる式部少輔となり、さらに兼ねて文章博士となっている。もう一人の文章博士は都良香である。都良香は、承和元年（八三四）生れたから、道真よりも一〇歳以上も年長で、文章博士になったのは貞観一七年で、道真よりも先行する。

元慶三年（八七九）正月七日に道真は従五位上となった。おなじ年の二月二五日に良香が四六歳の若さで亡くなっ

ている。生きていれば良香作が第一に披露されただろう、大極殿竣工を祝う賀詩を、道真が創作している。『三代実録』(陽成天皇、元慶三年一〇月)によると、右大臣藤原基経が朝堂院含章堂を会場に祝賀パーティーを催し、親王以下公卿が一堂に会するなか、文章生らが詩を賦したという。そつした席上、亡き良香にかわって道真の、次のような詩がうたわれた。

燕雀先知聖徳包

燕雀先づ知る 聖徳の包めることを

子来神化莫空抛

子のごとくに来り神のごとくに化る 空しく抛つことなくあれ

初成不日金猶在

初めて成ること日ならず 金猶し在るがごとし

且望如雲玉半交

且く望めば雲の如し 玉半交る

欲見高晴星旧拱

見まく欲りすれば高く晴れて 星旧くより拱す

応饒遠翥鳳新巢

饒なるべし 遠く翥りて 鳳新に巢くふ

棟梁惣出於槐棘

棟梁は惣べて槐棘より出でたり

誰愧唐堯不翦茅

誰か愧ぢむ 唐堯の茅を翦らざることを

(元慶三年孟冬八日、大極殿成り畢りて、王公会ひ賀べる詩)

三年前の貞観一八年(八七六)四月一〇日に、大極殿が焼失。六月には勅命によってただちに再建に着手、元慶元年には大極殿の構造が完成、四年あまりの歳月をかけて、このたび落成したのである。燕や雀が、天子の徳がまねく天下にいきわたり、こうして大極殿が完成したことをよるこんで集まっている、とつたつ。

竣工は「孟冬」(旧曆一〇月)だから、「雀」はともかくも「燕」では季節があわない。『淮南子』「説林訓」から、「湯沐具はりて蟻蝨相弔ひ、大廈成りて燕雀相賀す。憂楽は別なり」に拠つたらしい。「説林訓」は先行する「説

山訓」と同じく、教訓だったり、世俗批判・知識の披露だったり、故事説話だったり、ごくみじかい論説をアトランダムにならべている。

ここでは、沐浴せよくの準備ができる、しらみたちは互いに弔とむいあい、大きな家屋が完成すると、燕つばきや雀すずめは喜びあつ、憂樂は万物にとつてさまざまなものだ、の意。「燕雀」は小者を意味するが、そうした小者までもが、天子の徳に浴あしているというのだろう。

大極殿の工事のために、人びとが親をしたう子どものように集まって来て、天子の聖徳にふれ、まるで神に感化されたように力を発揮し、こうして正殿が完成した。短い期間で竣工にいたった。建物のそこには金の裝飾がほどこされて、まるで黄金があるようだし、遠くから見ると、もろもろの星が権力者の象徴である北極星に手こまぬを拱こまぬくかのように、八省の屋根は大極殿の大屋根につきしたがっている。その屋根の飾りといえば、瑞兆の鳳凰であり、まるでそこで巢をいとなんでいるかのようだ。

「棟梁」は建物を形づくる建材だが、ここではこのたびの再建けんいんの牽引者である右大臣藤原基経をはじめ、枢軸の高官たちをいうのだろう。かの中国の周の時代には、朝廷に三本の槐えいびと九本の棘いばらが植えられ、「三公」(最高権力者である三官)はエンジュに、「九卿」(中央九官庁の長官)はイバラに面して坐位を占めたといわれている。すると、道真はあらたに新殿が完成した陽成天皇の時代を、治政の理想とされた周代になぞらえたこと(3)になる。

さらに「唐葬の……」は、三皇五帝のひとりである葬が、茅で明堂を葺ふいたものの、軒先を刈りそろえようとせず、質素なままで政治をおこなったエピソードをふまえている。火災で焼失した大極殿だけに、その再建は吃緊きうきんな施策だったろうから、落成時にこまかな裝飾部分にまで手をつける時間的なゆとりはなかったはずだ。それを逆に見てとって、陽成帝を、理想的帝王とされる陶唐氏葬として賛仰するのである。

すでに書いたように、第一席の文章博士である都良香はすでに亡くなっているので、当然のことながら、道真が脚光を浴びたにちがいない。

創作の順序が前後するが、同じ元慶三年作に「講書の後に、戯に諸の進士に寄す」があり、『後漢書』の講義をしていた道真が、文章生たちに戯れてうたいかけたらしい。わたしはひとりっ子、勉学に励んでいて、いにしえの董仲舒とひとしく自宅の菜園さえ覗いたこともない、文章博士になれたのは祖父伝来の家風のおかげだし、式部少輔になれたのも祖父や父の業績のおかげだ、といった絶句である。

董仲舒は漢代の儒家で、武帝（前一五六―前八七）が儒教を国教としたのは（前一三六）、この仲舒の負うところが多いといわれている。若くして『春秋』を修め、景帝（前一八八―前一四一）のとき博士となり、郡国に太学を設置し五經博士をおくことを創案した。講義に没頭して三年のあいだ園庭をうかがわなかつたという。老いてりタイアしたものの、桂巖山に住み桂巖子と号して、なお儒教を鼓吹してやまなかつた。大儒中の大儒といってよい碩学の人である。

この一作では、作品そのものよりも、それに付された自注が注目される。

文章博士は材に非ずは居らず。吏部侍郎は能有らばこれ任ず。余が祖父より降りて余が身に及ぶまで、三代相承けて、兩つの官失へりしこと無し。故に謝詞有り。

道真は巨勢（味酒）文雄の後任として文章博士となつたのだが、それにたえられる文才がなければならぬのだし、式部少輔も能吏の力がなければならぬ。ここまでは詩の文言と大したちがいはない。しかし、わが菅原の家では三代にわたって「式部少輔」も「文章博士」も、ふたつの官のふたつとも失つたことはない、という自注は、周囲の官吏たちしてみると、いかにも嫌みたらしいことではないか。自らをかの儒者董仲舒になぞらえてうた

う、自身満々、誇りかな道真の顔がうかんでくる。

都良香が没したあと、そのポストは五年ほど空席だった。つまり、道真の独壇場だったわけで、精力的に仕事をこなせばこなすほど、羨望と誹謗、その活躍の陰で不遇をかこつ怨嗟の声までが、ひとり道真にあつまってくる。派閥で成り立っている官吏社会で、「独壇場」がバツシングの標的になるのは、今も昔も似たようなものだろう。うる盾だった父の是善が元慶四年（八八〇）八月に亡くなってからは、道真おろしがますます増幅していくのである。

四 ばらまかれた怪文書

出る杭はうたれる。元慶六年（八八二）、怪文書がばらまかれ、官界は道真スキャンダルで、大いに沸いたようだ。政界の最長老である藤大納言冬緒を中傷する匿名の詩が巷に流出。これほどの出来ばえは、きつとあの道真にちがいないとうわさがたつ（「思ふ所有り」）。

君子何悪処嫌疑 君子何ぞ嫌疑に処ることを悪まむ

須悪嫌疑涉不欺 嫌疑の欺かざるに涉ることを悪むべし

世多小人少君子 世には小人多く 君子は少ななり

宜哉天下有所思 宜なるかな 天下に思ふ所有ること

一人来告我不信 一人来り告ぐれども 我れ信ぜず

二人来告我猶辞 二人来り告ぐれども 我れ猶し辞す

三人已至我心動

三人已に至りて 我が心動く

況乎四五人告之

いはいは 況むや 四五人の告げむや

雖云内顧而不病

内に顧みて病しきことあらずと云ふとも

不知我者謂我癡

我を知らざる者は我を癡とや謂はむ

何人口上将銷骨

何人の口上か 骨を銷さむとする

何処路隅欲僵屍

何れの処の路の隅にか 屍を僵せむことを欲りする

君子たるもの、疑いをかけられたくらいは、何も気にしないもの、疑われているというのが、はつきりとしてくることを憎むのだ、と道真は思う。世間は小者ばかり、君子なんぞそっているものじゃない。だからこうして、匿名の詩はおまえが創ったのだからとうわさが立つことだって、人生に一度や二度はあるうというもの。

ある人が、その流言を道真に知らせた。道真はデマだと笑って信じない。こんどは別の人がやってきて、ふたたび知らせた。彼は、やはりそうではないと否定して、相手にしない。それでも、三人目ともなると、さすがに平然としていられなくなる。さらに四人目、五人目とつづく。正面きつて対峙できぬ小者たち、そのとる手といえ、意味ありげな耳打ち、おためごかしのアドバイス、スキヤンダル、スキヤンダル、スキヤンダル……。

疚しいことは何ひとつないものの、わたしを真から知らない者は、バカなやつだと思っただろう。いったい誰がいだしたことが、その中傷に苦しめられる。そればかりか、衆愚の吐く悪態にやがてはおし潰されて、どこかの路傍にうち捨てられた屍となり果てるだろう。もつとも性質が悪いのは、風見鶏よろしく、形勢をうかがっては日和る連中であることを、道真もじゅうぶん知っていたはずである。こうした風見鶏は今でもどこにでもいる。

「一人」「二人」「三人」「四五人」といった数詞の重なりが、しだいに平常心をかき乱されていく心情を、みごと

に表現している。次のように激昂してうたう。

取証天神与地祇 あかし 証を取る 天神と地祇とに

明神若不愆玄鑑 めいしんも 明神若し玄鑑を愆つことなくは

無事何久被虚詞 むじ何久被虚詞を被りてあらむ

靈祇若不失陰罰 れいぎ 若し陰罰を失はずは

有罪自然為禍基 有りて自然に禍の基たらまし

赤心方寸惟性幣 せきしむ ほうすん 惟れ性幣

固請神祇心我祈 まこと 固に請はまくは 神祇 我が祈りに応へたまはむことを

斯言雖細猶堪恃 こ 斯の言細なりとも 猶し恃むに堪へたり

更愧或人独自嗤 せ 更に愧むらくは 或る人の独り自ら嗤ふことを

天地の神にわたしが潔白である証明をとりつけてほしい、靈験あらたかな神がたたく鑑定してくれるのなら、うそつばちなうわさの濡れ衣をいつまでも着せられていることもあるまいに。『老子』（第73章）に「天網恢恢、てんもうくわいくわい 疏にして失はず」とある。(4) 天の網は「恢」（大きい）にして「疏」（粗い）、つまり天の網はとてつもなく広大でその目は粗いと、人には見えるが、それでいてこの網はけつして何もかも取りこぼすことはない、という。

神がもし罪ある者を罰する、そのはたらきをやめてしまわないのなら、真犯人はおのずと罰を受けるだろう。そして、この「方寸」の真心がいけにえであり、この真心をささげて一心に証しをたてられるように、といのるので、つづめていうなら、犯人に天罰をくだしてほしいというのである。

ささやかだけれど、道真が神にいのることはには、どうやら効果があったようだ。これは、たとえば、六世紀の

詩論である『詩品』(鍾嶸・四六八―五一八)に、

靈祇には之を待ちて以て饗を致し、幽微には之を藉りて以て昭らかに告ぐ。天地を動かし、鬼神を感ぜしむるは、詩よりも近きは莫し。

とあるのに、ひとしい。詩のちからを借りてこそ、超自然の神がみを祀ることもできるし、幽冥界へ意思を通じることもできる。天地をゆり動かし、人の耳目では接しえない鬼神の心をも動かすことにかけて、詩にまさるものはないのだ。彼は、自分の創作した詩歌が、鬼神までをも動かすちからをもっているという自負があった、というべきだろう。冬緒を誹謗する匿名詩は秀作だけに、もっぱら道真の作といううわさ ことはこれだけですまなかつた。翌年には、今度は道真というやつは下手な詩よみだという批難が起つたのである。

去歳世驚作詩巧 去んじ歳 世は驚く 詩を作ることの巧みなることを

今年人謗作詩拙 今年 人は謗る 詩を作ることの拙きことを

鴻臚館裏失驪珠 鴻臚館裏 驪珠を失ふ

卿相門前歌白雪 卿相門前 白雪を歌ふ

非顕名賤匿名貴 名を顕したるは賤しきにも 名を匿したるは貴きにも非ず

非先作優後作劣 先なる作は優れたるにも 後なる作は劣れるにも非ず

一人開口万人喧 一人口を開きて 万人喧し

賢者出言愚者悦 賢者言を出して 愚者悦ぶ

十里百里又千里 十里 百里 また千里

駟馬如龍不及舌 駟馬は龍の如くなれども 舌に及ばず

右に引用したのは、「詩情怨、菅著作に呈し、兼ねて紀秀才に視す」の前半部。「菅著作」は菅野惟肖すかのこれすえ、「紀秀才」は紀長谷雄きののはせお。惟肖は菅家廊下（菅原氏の私塾）で『漢書』を講義するほど、親しいつき合いだったらしい。惟肖に贈った詩を、当時文章得業生だった長谷雄にも見せたという。道真にとって、ともに気がおけない仲だった。

「鴻臚館」とは、外国からの使者を迎える迎賓館で、前年（元慶七年）に渤海から使節団一〇五名が加賀国に上陸、この年の四月二十八日に都に到着している。大使の裴頰はていは著名な詩人である。接待係のひとりとなった道真は裴頰と、たがいに詩の献酬をおこなって楽しんだ。そのみならず、かさねて裴頰は道真の詩才のゆたかさを、「白氏が体を得たり」とほめた。道真作の風体がかの白楽天（七七二―八四六）に似ているというのだから、最高のほめことばである。その詩評に道真は感動しただろうし、詩人としての自負心もおぼえただろう。当然のことながら宮廷に波風が立つ。

ところが、裴頰を迎えて「驪珠」（詩の名声をたとえた）を得るはずだったのに、道真の作品がまずい詩だとうわさが流れる。藤原冬緒をまえに「白雪」（なみなみならぬ秀作をたとえた）をつたつたという去年の流言。名のある作品は駄作だといい、名のない作品は優秀だから道真作だといちらす。あれほど世間は巧い詩だからお前の作だろうと疑いをかけたのに、明らかにわたしが作った詩は、できがわるいと批評する。何たる矛盾、何たるへ理屈くづ。

地位のある御仁ごにんがひとりでも口をひらくと、下じもの愚かな連中はわれもわれもと、それに雷同する。そして、またたくまに、うわさは一〇里、一〇〇里、一〇〇〇里とひろがっていく。四頭立ての馬車は龍馬のように疾走するが、その馬車で追いかけて、一たん口に出た風評は、もはや取り返しがきかないのだ。おそるべきは、宮廷のあちこちでヘラヘラと動く「舌」の数かず。それを想像するだけでも、おぞましくて、道真は吐き気をおぼえた

ことだらう。

彼は別の作では、こうもうたっている。

讒舌音声竿尚濫

讒舌の音声 竿よりも尚し濫なり

厚顔脂粉鏡知媼

厚顔の脂粉 鏡は媼きことを知る

雲生不放寒蟾素

雲生るれば 寒蟾の素きことを放たず

桂死何勝毒蠹縊

桂死れむとして 何ぞ毒蠹の縊きことに勝へむ

銷骨元来由積毀

骨を銷すこと 元来毀りを積むに由る

履氷未免老狐疑

氷を履みて 老狐の疑ひを免れず

「余近ごろ、诗情怨一篇を敍へ、菅十一著作郎に呈せり。長句二首、偶然に誦いらる。更に本韻に依りて、重ねて答へて謝しまつる」と題された作品(部分)。さきに「诗情怨」を贈られた惟肖が、二首の答詩を道真に贈つたらしい。それに感謝しつつ、またまた創作の筆をとつたというのである。

右の贈詩は「君に請ふ 好んで詠ぜよ 一篇の詩」からはじまるから、道真の憤りはおさまつてなかつた、といふより惟肖から答詩を贈られ、ますます憤憑(ふんまよ)やるかたなしといった気分だったのだらう。悪口というものの声のひびきたるや、さお竹を吹くよりもっと好き勝手だし、醜女(しづめ)がやたら厚化粧(おしろい)をしてみても、鏡はその素顔(すがん)がどんなものか知っている。分かつたふうな顔して批評していたところで、中傷する恥知らずだという真相を、天はとつてに知っているのだ。雲が生じると皓暗(こうあん)と降る冬の月光(げつこう)がさえぎられるし、毒をもつクイムシにむしばまれると、月に生えている桂の樹も枯れてしまう。

「蟾」は蟾蜍(せんとく)、月に棲んでいるといわれるヒキガエル。「蠹」は体長一、五、四ミリほどの甲虫。幼虫も成虫も木

に穴をあけて暮らし、林業者にとって厄介な毒虫。「桂」も月世界のものである。厚顔無恥の醜い女、湧き立つ雲、キクイムシ、これらはすべて藤大納言冬緒を暗に揶揄した語句である。

昔から、人もくり返して誹謗されると、そのうち骨と肉が離れてしまつてはいないか。疑りぶかい狐というやつは、氷を踏んで川を渡るのに、水音を聞き聞きして渡るといふ。いったんうわさを耳にした老いた狐は、どこどこまでも疑いをいただき、かけられた疑惑をまぬかれることができない。あの疑りぶかい老いばれ狐め。執拗な中傷に悩まされた道真はいつそ出家してしまおう、とも考えたようだ。

これまでにふれてきた道真の詩は、公の席で披露されたのではなく、親しい者のあいだで往還した作品にすぎないのだが、それにしても、あまりにも放埒が過ぎはしないか。「讒舌の音声」「厚顔の脂粉」「毒蠱」「老狐」など、こうした語句をもって警えられた側からすれば、迷惑千万、不愉快きわまりない表現というほかあるまい。傷ついたプライドのさげ目から、やり場のない道真の憤りが、情炎となつて噴きたつ。

道真には火焰土器にみられるような、縄文の、あまりにも過剰なエネルギーがながれているのである。

五 山陰亭と菅家廊下

寛平四年（八九二）五月、道真は宇多天皇のために『類聚国史』（全二〇〇巻）を編んでいる。『類聚国史』は、編年体の歴史書である『日本書紀』から『文徳実録』にいたる五国史を、内容ごとに分類した史書である。本史二〇〇巻・目録二巻・系図三巻があつたと伝えられるが、後に散逸してしまい、六二巻が現存している。清和、陽成、光孝天皇の時代を記録した『三代実録』からの記述は、ほかの人によって加筆されたらしい。

二一〇巻の全容は、もはや知るすべないものの、現存本から知られる部名は、神祇・帝王・後宮・人・歳時・音楽・賞宴・奉獻・政理・刑法・職官・文・田地・祥瑞・災異・仏道・風俗・殊俗の一八部である。こうした部立は、各部でさらに細目によつて分類されている。原典の三分の一ほどしか残されていないが、それでもなお資料は膨大である。

『類聚国史』から、その内容をほんのすこしのぞき見てみよう。

- ・文武天皇大宝元年八月辛酉、參河、遠江、相模、近江、信濃、越前、佐渡、但馬、伯耆、出雲、備前、安芸、周防、長門、紀伊、讃岐、伊予十七国蝗。大風壞百姓廬舍。損秋稼。
- ・二年三月壬申、因幡、伯耆、隱岐三国蝗。損禾稼。
- ・慶雲元年八月戊午、伊勢、伊賀二国蝗。
- ・聖武皇帝天平廿一年二月庚子、下総国旱蝗飢饉。賑給之。
- ・広仁天皇宝龜七年八月庚午、天下諸国蝗。畿内者遣使巡視、余者令国司行事。
- ・嵯峨天皇弘仁三年六月辛卯、薩摩国蝗、免連負稻五千束。
- ・四年六月甲申、大隅、薩摩二国蝗。免未納稅。
- ・六年五月甲申、薩摩国蝗、免調庸田租。
- ・十年十一月丁丑、薩摩国蝗、免田租。
- ・清和天皇貞觀十六年八月丁巳朔、伊勢国上言、有蝗虫食稼、其頭赤如丹、背青黑、腹斑駁、大者一寸五分、小者一寸、種類繁聚、一日所食四五町許、其所一過、無有遺穗。十三日己巳、遣從五位下守玄蕃頭弘道王於伊勢太神宮、奉幣禱去災蝗、從此以後、蝗虫或化蝶飛去、或為小蜂所刺斃、一時消尽矣。

これは第一七三巻にある「災異部七」から、もっとも短い「蝗」を引用した。これだけの記述からも、興味深い史実が見えてくるだろう。文武天皇の大宝元年には全国一七国にわたって被害が出ている。ただし、日本の場合、飛蝗（バッタ科バッタの変種）でなくて、蝗（イナゴ科イナゴ）や浮塵子（カメムシ目ウンカ科）の害も蝗害とみたようだ。

聖武天皇の天平二年（七四九）の蝗害は、二月に発生している。天平二年といえは、二月に陸奥国から金が献上されたことにより「天平感宝」に改元、さらに聖武が讓位し、娘の阿倍内親王が即位して孝謙天皇となったために、七月にふたたび改元して「天平勝宝」となった。『続日本紀』には、「己巳、比年頻に亢陽に遭ひて五穀登らず、官人の妻子多く飢乏たること有り。是に文武の官と諸の家司とに米給ふこと、人別に月に六斗なり。乙亥、上総国飢乏ぬ。」とあるところから、この数年日照りが続き、農作物の実りがかんばしくなかったらしい。正月乙亥（一〇日）上総国で飢饉。かろうじて冬は越したものの、その歳に撒くはずの種もみまで食い尽くしてしまった人びとが想像されよう。そして二月、隣国にあたる下総国で蝗害が起こったのである。

こうした蝗害の実態は、すでにいにしえから知られていたらしく、『三代実録』から引かれた清和天皇貞観十六年の記述は、これを語るだろう。頭部は赤く背中の部分は青黒色、腹部は斑模様だったというのだ。何とも不気味な虫だが、一日に数ヘクタールが被害にあつていて、ことは深刻である。

「災異部」一〜三の部は欠、六（第一七二巻）も欠、七が現存するが、そのあとの第一七四巻〜第一七六巻が欠けている。第一七七巻が「仏道部四」だから、この欠けた巻々には「仏道部」が編集されていたらしい。そうなら、「災異部七」の火・蝗・凶年・三合歳（大凶の歳）・疾疫までが「災異部」だったのだろう。とはいえ全容が、いったいどのような内容だったのかわからない。『類聚国史』の完本がないのが残念なのだが、どこの部を取りだして

も、とにかく実用向きに徹していて、資料として使い勝手がいい。編者の道真が原文に自分の意見を書き足すことなく、用いる者の実利だけを重視して、編纂しているからである。彼の連なる氏族がまだ土師氏とよばれていた頃、弥生式土器の流れをくむ、端正な「実用美」を追求していたように。

道真の邸宅のすみには書院の山陰亭があつた。庭先にはひと株の梅とひと群むらの竹が生えている。そこは講義をする菅家廊下（私塾）でもあつたから、たくさんの人びとが入り出していたらしい。当時の私塾には、藤原氏の勸学院、和氣氏の弘学院、橘氏の学館院、在原氏の奨学院などがあり、いわゆる学閥間の熾烈な争いをくりかえしていた。菅家廊下という名は、祖父の清公が、書齋につづく廊下を、門人たちが学ぶ学舎にしていたところから名付けたよつだ。

道真が寛平五年（八九三）七月一日に書いた『書齋記』（『菅家文章』巻7）で、彼の友人論や研究論などもおり交ぜながら、菅家廊下に入りする門人たちをいきいきと描いている。摘記しながら読んでみよう。

東の京の宣風坊に一つの家有り。家の坤ひつひの維まに一廊有り。廊の南の極かたはらに一局いちぶ有り。局の開ける方あた纒ちぢに一丈余り、歩あゆを投なずる者ひと、進退しんたいに傍かたはらを行き、身を容ゆるめる者、起居きこに席まを側そばだつ。是に先まんずる秀才しゅうたい進士、此の局より出づる者、首尾しゅび略りやく計けいふるに百人に近し。故に学者、此の局まを目めけて龍門りゆうもんと為なす。

亦山陰亭と号づくるは、小山の西に在るを以てなり。戸前かたはら近ちかき側わきに一株の梅有り。東に去ること数歩、数竿の竹有り。花の時に至る毎ごとに、風の便りにあたる毎ごとに、情性せいせいを優暢いうちやうするに可よく、精神を長養ちやうやうするに可よし。余われ、秀才しゅうたい為なりし始め、家君けきん教のりを下くだして曰いはく、此の局は名のある処ところなり。鑽仰せんやうの間あひだ、汝なんぢの宿廬しゆくろと為なよと。余即ち簾席れんせきを移し以て之を整へ、書籍しゆせきを運び以て之を安やすく。

「東の京の宣風坊」にあつた邸宅のすみに、「廊下」があつた。けつして広いとはいへなかつたが、ここが校舎で門人たちが学び、その奥には山陰亭と名付けられた道真の書齋があつた。書齋のそばには梅の木や竹が植えられており、四季折々、道真はここをたいそう気に入つていたらしいが、後述して「嗟乎、地勢は狭隘なり」となげいてゐるから、かなり狭かつたようである。

菅家廊下からは、一〇〇名ちかい文章得業生や文章生を輩出。学ぶ人びとはここを「龍門」とみなしたといふのである。『後漢書』（李膺伝）にある、中国黄河に竜門とよばれる激流があり、そこを溯上できた鯉は竜になれるといふ、例の「登竜門」故事をつけて、菅家の学問所が立身出世の、まさに「登竜門」だつた。藤原道明、藤原扶幹、紀長谷雄、橘澄清、藤原邦基ら、のちに政界で活躍する錚々たるメンバーが学んでゐる。

私塾が乱立するなか、ことに大蔵善行の主宰する私塾とはしのぎを削る関係で、その大蔵塾から藤原基経、藤原時平、藤原忠平、平伊望、平惟範、紀長谷雄（のちに道真に師事、『菅家後集』を編む）らが、その講席にあつたことを思えば、学閥抗争の力関係は、そのまま官界に生きた人びとの生涯を、良くも悪くも大きく左右してゐたといふべきだろう。

さて、菅家廊下の日々は、こうである。

人情崎嶇なり。凡そ厥れ朋友、親しき有り疎き有り。或は心に合ふ好無けれども、顔色和らげるが如き有り。或は首陀の疑ひ有れども、語言昵じきに似たり。或は蒙を撃つと名づけて、妄りに秘蔵の書を開け、或は謁を取ると称して、直ちに休息の座を突く。

又刀筆は書を写し謄りを刊るの具なり。烏合の衆に至りては、其の物の用を知らず、刀を操りては几案を削り損ひ、筆を弄びて書籍を汚し穢す。

学舎に出入りする門下生たちは十人十色。「崎嶇」はもともと山道がけわしいことをいい、転じて世渡りのむずかしさを意味する。ここでは人の心の測りがたさをいうのだらう。「首陀」は「首陀羅」、インドでは隷屬民をいう。ここでは身分は低いものの、親しく語ることができるような、という意味か。ガヤガヤ騒がしい連中のなかには、道真が大切にしている貴重な本をやたら見よつとする、ナイフをいたずらしては机にキズつける、筆をもてあそんで書物のあちこちに墨をつける、そんなふとどきな輩もいる。「其の物の用を知らず」というが、もちろんこれは皮肉をきかせた表現。門下生たちが調子づいてふざけたのだらう。菅家廊下は、肅々と勉強に励むばかりの私塾ではなく、張りつめた緊張のなかにも、門人たちの主体性にゆだねるような、自由な雰囲気のある学問所だったのかもしいない。

道真は学問の道について、次のようにつつつっている。

学問の道は抄出を宗と為す。抄出の用は稟草を本と為す。余は公平の才に非ざれば、いまだ停滞の筆を免れず。故に此間に在りと在る短札は、惣て是抄出の稟草なり。しかるに濫りに入る人は、其の心察し難し。有る者は、之を見て巻きて以て之を懐にす。智無き者は、之を取り破りて以て之を棄つ。

「抄出」とは要点を抜き書きすること、「稟草」は下書きすること。「公平」は後漢の文人馬防か。道真は抜き書きしたカードを大量に作成し、そのデータを利用していたらしい。ところが、すこし学のあるやつは「これは便利だ」と自分のふところに入れてしまつし、学のないやつはこちらの苦勞を知りもせず、「役に立たぬ」とやぶり捨ててしまつ、と。

抄出カードをならべかえて分類する　これが道真の採用した、データ処理のメソッドだった。カードなら必要に応じて簡単に取り出せ、幾度も用いることができる。ぼう大な国史の記事を整理するには、なにより合理的でム

ダもなく、スムーズな編纂作業ができたはずである。訪れた者たちが、つい手をのばしたくなるほど、工夫されていたのだらう。「実利」と「合理性」にあふれたオリジナルの道真カード、それが整然とならんでいる山陰亭の光景がありありと目に浮かぶ。

六 阿衡紛議の顛末

実用性・合理性をよしとする道真の性格は、学究のうえだけではなく、政治活動のうえでもうかがえるだらう。たとえば、阿衡の紛議（仁和三年・八八七年）。在位わずか三年で光孝天皇が崩御する。皇位についたのが定省親王（宇多天皇）である。ただ光孝天皇の第七皇子だった定省はすでに臣籍にあり（源定省）、光孝の重篤にあたって皇籍に復して皇太子となつたのであり、尚侍だった藤原淑子が兄の基経とはかつて、皇位継承をプロデュースしたというのが実情のようだ。つまりキング・メーカーは、まぎれもなく基経なのである。

光孝天皇の即位の顛末をふりかえってみよう。陽成天皇を退位させ、時康親王（光孝天皇）を即位させたのも、じつは基経である。このあたりを語るのは、『大鏡』（基経伝）だらう。

陽成院ありさせたまふべき、陣の定にさぶらはせたまふ。融のおとど、左大臣にてやむことなくて、位につかせたまはむ御心ふかくて、「いかがは。近き皇胤をたづねば、融らも侍る」といひ出でたまへるを、この大臣こそ、「皇胤なれど、姓たまはりて、ただ人にて仕へて、位につきたる例やある」と申し出でたまへれ。「さもあることなれ」と、この大臣の定によりて、小松の帝は位につかせたまへるなり。

席上、左大臣の源融（嵯峨天皇第二皇子）が、天皇を決定するのにむずかしい議論をする必要はない、近い血

筋をもとめるなら、この融自身も皇嗣すうしの候補者であると自薦する。それをしりぞけたのが基経で、たとえ天皇の血筋であっても、いったん臣下となり姓をたまわった者が皇位についた前例はないと反論、一同がその裁決に賛成して、「小松の帝」(光孝天皇)が即位するはこびとなったという。臣籍にある融は皇嗣の資格なしとして、しりぞけられたのである。

こうした基経の考えでは、臣下として朝廷につかえている定省は、皇位につけなかつたはずである。ところが宇多天皇の場合には、これとはま逆さかの扱いであつて、たとえ淑子が懇願したにしても、基経のなみなみなならぬ源定省への配慮がなければ、ことは即位にまでいたらなかつたにちがいない。光孝にしても宇多にしても、二帝それぞれの践祚せんそに、基経の功績ははかり知れないものがあつた。

にもかかわらず、阿衡の紛議事件が起こつてしまつたのである。仁和三年一月二一日、宇多天皇は詔をもつて、基経に「それ万機巨細、百官己れに惣すべ、皆太政大臣たうせいだいじんに関まかり白せ。然る後に奏し下すこと、一に旧事の如くせよ」と命じる。起草は参議で左大弁兼文章博士の橘広相たちひろむか。広相は紀伝道を道真の父是善に学び、貞観二年(八六〇)に文章生となり、その補任から五年あまりで文章博士となつてゐるから、かなりすぐれた才の持ち主だつたのだらう。光孝天皇即位後の元慶八年(八八四)には、参議。光孝朝に紀伝道の權威であつた。九歳で童殿上わらわ、その時すでに漢詩をよんだというエピソードがある(『江談抄』巻4の語るところ)、天下の秀才である。

宇多天皇の命をうけた基経は、閏一月二六日に、慣習にしたがつて要請を辞退する。要職にあてられた場合、臣下たるもの幾度か辞し、さらに懇請されてはじめてその職に就くのである。翌一七日に例によつて、あらためて詔がくだる。原稿を書いたのはやはり広相である。その文中に、問題の「阿衡」のことはがあつた。「宜しく阿衡の任を以て卿けいの任と為すべし」。この表現に左少弁兼式部少輔すけがかつ基経の家司だつた藤原佐世すけよが、「阿衡は職務の

ない名譽職だ」と咬みついたのだ。もちろん広相が基経を軽んじるわけではない。最高に讃えたことばが「阿衡」だったのに、逆手にとられたのである。

「阿衡」といえば、宮中の人びとがすぐに思うのは、中国夏の末期から殷（商）の時代に活躍した、賢臣として知られる伊尹だろ。『蒙求』「伊尹負鼎」から、短いエピソードを引く。

史記にいふ、伊尹湯に干めんと欲するも由無し。乃ち有莘の媵臣と為り、鼎俎を負ひ、滋味を以て湯に説き、王道に致す、と。或ひは曰く、伊尹は処士なり。湯、人をして之を聘迎せしむ。五反して然る後に背て往きて湯に從ひ、素王及び九主の事を言ふ。湯拳げ任ずるに国政を以てす、と。

伊尹は、洪水にあった母が桑の木となり、その幹から誕生した、つまり洪水の申し子だという。成人して湯王につかえようとしたが、その手立てがない。有莘氏の娘が湯に嫁ぐと聞き、その下僕となって近づく。鼎やまな板を背負って料理の道のプロだと信頼させ、やがて湯王に王道をなさしめた。

あるいは伊尹は賢者であったが、つかえようとしな。そこで使者が五回も往復し、やっと任官を承知させた。彼は湯王に、質素をもって道とした太古の王や九主（三皇五帝と夏の禹王をいう）の王業を説いたので、湯王はたいていそう感動し国政のいっさいをまかせたというのである。夏をほろぼし殷が頭領の権力をにぎる争いの立役者が、伊尹だった。

湯が崩御し外丙が即位する。湯王には太丁という太子がいたが、夭逝。太丁の弟が外丙。ところが、この外丙は即位して三年で没し、あらたにその弟の中壬が即位。即位はしたものの、こんどは四年で没。そこで伊尹は、太丁の遺児の太甲をたてて帝位に即けた。

何とも不幸なことに、太甲はおろかで乱暴者、王の器ではなかつたようで、伊尹は三年後に、自らの手で太甲を

桐宮に追放している。追放は三年にもおよび、その間、国務は伊尹がとつたという。のちに大いに反省した太甲に大政を奉還したが、復歸した太甲はまもなく没し、子の沃丁が即位する。沃丁の背後に伊尹の存在があったことはいうまでもない。

やがて死んだ彼は、殷の国都である亳に葬られ、殷の祖廟にまつられる。「伊尹を祖とす」(『呂氏春秋』)のことが、彼の力がいかに絶大だったかを語るだろう。以上、かけ足で生涯をたどってみたのだが、王の進退をも左右する力をもつのが、伊尹なのである。

それでは、この伊尹(＝阿衡)について、基経は何も知らなかっただろうか。すでにふれたけれど、宇多天皇の父、かの光孝天皇が位に即位したのは、元慶八年(八八四)二月。この年の六月に光孝天皇は、太政大臣の職掌に疑問をいだいた基経に、詔をもつてこたえている。それに、

太政大臣藤原朝臣、先の御世御世より天下を濟助け朝政を総へ摂めて奉仕れり。……大臣の功績既に高くして、古の伊霍よりも、乃が祖淡海公、叔父美濃公よりも益り……

と、のべている。淡海公は藤原の祖不比等であり、美濃公は白河殿とか染殿の大臣とよばれ、清和天皇の時代に摂政となつた叔父の良房をいう。

これらの人物と前後するが、「古の伊霍」よりもまさっているとする。「伊」は、もちろん伊尹のこと。「霍」は前漢時代の霍光(？前六八)をいう。霍光は武帝につかえて信任が厚く、武帝が亡くなるとき、まだ八歳だった昭帝の補佐役に彼を任じた。昭帝をよくささえたが、子のないままに昭帝は没。そこで霍光は昌邑王劉賀なる人物を帝位に即けたものの、帝王の品行に欠けるとしてわずか二七日で廃位。武帝の曾孫を即位させた。即位後の宣帝が、政治的な実権を霍光にゆだねる勅書に「諸事皆光に關り白して然る後に天子に奏御せしめ」の表現が見え、こ

れがいわゆる「関白」の名の由来となっている。また関白を「博陸」ともいうが、これは霍光が博陸侯だったことによる。

こうしてみると、基経は光孝天皇の時代に、伊尹と霍光がいに名臣だったかを、すでに知っていたのである。にもかかわらず、佐世の意見にしたがって（あるいは、したがうふりをして）公務のすべてをポイコットしたのは、「阿衡」の内実に不満をもったからではなく、思惑は別のところにあつたと考えるべきだろう。

その第一に、宇多朝での広相の力を削ぐこと。勅書を草した広相は、宇多天皇が即位する以前に娘の義子を嫁がせており、宇多と義子の間には、斉中親王と齊世親王があり、天皇の即位にもなつて広相が力を増すのは、基経にとつて面白くない。第二に、政界において、いったい誰が最高権力者であるかを宇多天皇に再認識させること。

宇多天皇は即位してすぐに、政界の刷新をはかつて公卿たちに意見をもちあつておられる。天皇親政ともなれば、それまで基経が掌握していた権力を削ぐことになりかねない。いったん政務を放り出してみるのも一策かもしれない。たぶん基経の腹中にはそのようなプランがあつたのかもしれない。

案の定、四か月にわたる国政はとどこおつた。翌年の仁和四年四月になり、困り果てた天皇は、左大臣の源融に「阿衡に典職あるや否や」のデータをすみやかにそろえ、明らかにするように命じる。惟宗允亮がまとめた『政事要略』「年中行事（阿衡事）」（巻30）に、くわしく記録されている。

仁和四年四月二八日 勘文 中原月雄と善淵愛成の連名

仁和四年某月某日 勘文 橋広相

仁和四年五月三日 勘文 紀長谷雄・三善清行・藤原佐世の連名

仁和四年五月二日 勘文 反広相サイドの某

仁和四年五月三〇日 勘文 紀長谷雄・三善清行・藤原佐世の連名

仁和四年六月某日 勘文 中原月雄と善淵愛成の連名か

仁和四年一〇月一五日 勘文「勘申左大弁正四位下橋朝臣広相犯罪事」桜井貞世・凡春宗・惟宗直宗

「阿衡」の職掌をはつきりさせるのが目的だったけれど、基経のねらいはそこになかったのだから、政界で反広相の意見ばかりが幅を利かせるのは、予想されたなりゆきだろう。基経がどこまでプロデュースしていたかは明らかにはならないが、マスコミをつかって世論をあおり、どこどこまでも天皇に譲歩をせまって、その後で指弾する力をゆるめてみる……そうした出来レースが見え隠れする。天皇は左大臣源融の奏上にしたがって、しぶしぶ勅書の内容を改め、広相は失錯しつごくの責任一切をとった。『宇多天皇御記』(『政事要略』に引く)に、

朕遂不得志、枉隨大臣請、濁世之事如是、可為長大息也

と書いている。宇多天皇は志をつらぬくことができずに、枉まげて左大臣の要請にしたがったものの、濁世じよくせなんてこんなものなのだ、ああ、ため息がでる、と。「長大息」のことには、ままならない治世ちせいへの無念の思いがにじむ。ことはそれでおさまったわけではない。広相が宇多天皇の意思のあるところを理解せず、詔書の草稿を書きあやまったのだから断罪すべし、さあ遠流だ、さあ罰金だといった、ぶっそうな勘文まで提示される始末だった。最初から勝ち負けの決まった出来レースの勝利者基経には、ご祝儀もついてきた。仁和四年一〇月六日、彼の一七歳になるむすめ温子が入内したのである。

七 道真の意見

京の都が阿衡の話題で持ちぎりのころ、道真は讃岐国にいた。仁和二年（八八六）正月、基経の子である時平が一六歳で元服。その二週間後に人事異動があり、それまでの役職であった式部少輔・文章博士・加賀権守のすべての役職をとかれて、讃岐国へ転出したのである。讃岐時代は仁和二年から寛平二年まで、道真の年齢でいうなら四二歳から四六歳までにあたるが、これについては別のところで話題にしよう。

在任期間の三年目、一説によると仁和三年秋に一時上京し、翌年春に讃岐に帰任した。この間に、「昭宣公に奉る書」と題された書簡を基経に呈したといわれている。「昭宣公」とは基経の諡（おくりな）（亡くなった後の称号）だから、もともところついた題目があつたわけではなく、後日に「奉昭宣公書」として整理されたものだろう。入京した道真が基経に奉つたそのものでないくんだりもあるかもしれないが、それにしても文の冒頭からかなりインパクトがある。
某なほし某白す、信じて諫めざるを誦いよひと謂ひ、過ちて改めざるを過ちと謂ふ。某、去年平季長と共に警説けいせつを陳ぶ。

是れ諛うなり。今日、愚歎ぐたんに堪へず、独り狂言を進む、是れ過なり。某万死再拜す。

これぞと信じているにもかかわらず、それにしたがって年長者を諫めようとしなさい、これを阿諛あゆという。過あやっているのに過あやっているとしないのなら、これこそ過ちというのだ。道真は平季長とともに「警説(8)」を述べて勘申したようだが、今日、どのような内容だったのかわからない。忌憚きたんのない諫言を述べ立てたものではなかったらしい。それを猛省し、基経に一八〇〇字にもおよぶ書簡を提出したのである。

一に、「阿衡」に『毛詩』『尚書』『儀礼』『後漢書』ほか、諸氏がさまざま書籍に典拠をもとめているが、文章道では、史書の用例にかなっていればよいのであり、「阿衡」に典拠があるや否やに目くじらをたててみてもら

意味はない。ましてや広相が「大府」（＝基経）をあらゆる権力を超えた聖賢ともいうべき「阿衡」（＝伊尹）になぞらえたのは、理になつたものであつて、「異心をさし挟んで」「この一文（詔書）を草することなどありえない。一に、広相は、即位前の宇多天皇に娘義子を嫁がせ、すでにふたりの外孫が誕生しており、天皇に対する「親故功勞」は甚大、信賴もあつた。にもかかわらず、今その広相を政治の枢軸から遠ざけようとするのは、どうみても得策などではない。ましてや、天皇の本意に乖まいた詔書を書いた罪として、「職制律」と「詐偽律」をもつて裁くべきだというが、この二法規に照らしても、罰する根拠にとほしく、罪がないのは明らかであつて、不当だ。

一に、そもそも広相の責任をどこどこまでも追求し処分することは、「大府」にプラスにならない。「才智謀慮」「親故功勞」の広相を罪すれば、かえつて「大府」が世間からつらまれるのオチだ。いまや藤家は、基経の「徳」で、ますますさかえようとしているのに、たかが「阿衡」の二文字にこだわりの家の名を汚けがしてよいのか。

これが、道真の主張するところである。このあたりの文面には、「大府臨時」「大府居位」「大府撰政」「大府神明之徳」「大府裁察」「大府深思遠慮」……といった具合に、「大府」のことが集中する。基経周辺の通儒たちは、はなから道真の視野に入つておらず、基経の私情と直接につながらうとする。ムダのない、徹底的な合理主義がここにある。

八 むすびにかえて

繩文の「過剰性」と弥生の「実用性」 道真には、土師氏のふたつの血が流れる。過剰な感動と熱狂だけでも、あるいはそれとは逆の、冷めた実利偏重だけでも、たぶん政界では生きてはいけまい。そのバランス感覚こそ時代

がもとめたものであった。

注

(1) 『続日本紀』には、道長の名があるが、『菅原家系図』には古人の子は清公・清岡・清人の三人をあげ、道長の名はない。『菅原家御伝記』には古人の長男として道長の名がある。

(2) 野見宿祢の始祖が出雲国造の祖「天之菩卑命」であり、出雲の出自であるのは当たりまえといえれば当たりまえなのだが、野見宿祢と当麻蹶速の「搦力」の記事から、朝鮮半島北部に残る三世紀から五世紀あたりに築かれたらしい高句麗の遺跡のひとつ、角抵塚の壁画を想起するのは容易だろう。いわゆる相撲の起源がどこにあるのか、野見宿祢のすぐれた力技は、朝鮮半島をふくむ大陸から伝わってきたのかも知れない。志賀清林の出自が渡来系の人びとが多い近江国であったのも、単純な暗合とは考えられない。

(3) 慈田の『愚管抄』(巻3)は陽成を評して「この陽成院、九にたくらいにつきて八年。一六までの間に昔の武烈天皇の如くなめならずあさましくをはしましければ……」(巻3)と伝えている。武烈といえ、中国の桀や紂のような極悪非道の暴君として描かれている。『日本書紀』(こうした武烈よろしく陽成も同然。人を木にのぼらせてわざわざ落とし「撃殺」した、乳母紀全子の子である源益なる人物と相撲をとっていて殴り殺した、生涯にわたって馬をこよなく愛し、それに乗ってしばしば暴走して楽しんで、などなど)、『日本三代実録』。

『今昔物語集』(巻20)「陽成院御代滝口金使行語」では、滝口の道範が陸奥国へ砂金運上使となって派遣されたとき、信濃国で郡司の妻にいいより、郡司に幻術で苦しめられたのをきっかけて、弟子入りして幻術を修行。京へ帰ってからは、脱ぎ棄てたはきものをイヌの子にかえてみたり、古いわら靴を三尺ばかりの鯉にかえて、生きたまま台盤のうえでねかせてみたりした。

これを聞いた陽成は道範を宮中に召喚して、その術を習う。ついに陽成は几帳の横木のうえで賀茂祭の行列を通らせることができるようになった。帝王でありながら三宝(仏・法・僧)に背いて幻術を習ったせいで、のちに狂気になってしまったのである。陽成の奇矯なるまいが、どこまで史実かはわからない。わずかに九歳で即位、一七歳で退位し八二歳で崩御しているのを考えると、どうしても陽成に天皇の位をおりてもらわねばならなかった側(藤原基経ら)が、ねつ造し喧伝したことがらも多いだ

る。

(4) 「……天の道は争はずして善く勝ち、言はずして善く応じ、召さずして自ら来り、せむじ 繚然として善く謀る」につづく一文。天の道は招かなくとも自然にやって来るし、まどろっこしいようにみえるが、じつは善く謀っていて、かならず道にそむく者には禍わざはひ、道にしたがう者には福を授けている。これが老子の主張するところ。

(5) 京都市下京区菅大臣町。邸宅跡に菅大臣神社があり、かつて菅家廊下があったあたりには北菅大臣神社がある。

(6) 『菅家万葉集』ともよばれる『新撰万葉集』の編纂も、こうした 道真カード の成果だろう。『日本紀略』寛平五年九月二十五日に、「菅原朝臣、新撰万葉集二巻を撰進」と見える。現在の『新撰万葉集』は幾度もひとの手がくわえられているようで、「寛平御時 后宮歌合」をもって万葉仮名表記に翻訳し、さらにその和歌に共鳴する漢詩を併記している。現行本二巻は上巻が春歌二一首・夏歌二一首・秋歌三六首・冬歌二一首・恋歌二〇首、下巻が春歌二一首・夏歌二一首・秋歌三六首・冬歌二一首・恋歌三一首（異伝本は、さらに女郎花歌二五首）で分類し構成されている。下巻は延喜の成立らしく、道真の手によるものではない。漢文の序文には「……先生、ただ 倭歌の佳麗を賞めでるのみにあらず、兼ねて亦一絶の詩を綴りて、数首の左に挿む」。道真が全面にわたって執筆し編纂したのではなく、門下生たちの主体性にゆだねていたように思われる。道真カード が大いに活躍したところだ。

(7) 時康親王の母藤原沢子と基経の母之春とが姉妹で、幼いころから基経は時康と親しくしていたからかもしれない。

(8) 「警説」は班彪はんひょう（三丁五四）「王命論」にあることは、理にはずれた愚かな説の意。道真は自らの意見をまことに愚かな説ではあるが……とするのであるが、この「警説」に着目すると、もつすこし道真の勘申しようとする内容が見えてくるように思われる。「王命論」の展開にそって内容をたどってみよう。

班彪は、天子（権力者）の位とは、祖先の積み重ねられた大いなる功績があり、その真心が神に通じ恩沢が民衆にくわり、ために鬼神にみとめられ、天下の人民がしたがってこそ、はじめて得られるものである、と論じている。遊説の人びとは、天下を取れることを野で鹿を追うようなもので、幸いに足が速くて手に入れることができると思っっている。天子の位は天命によるものであって、知力によって求めることのできないものであるのを知っていない。いにしえ陳嬰ちんえいの母や王陵の母は、婦人ながら天命たるものを知ってわが子を戒めたが、男子なら当然のこと世の興廢こうふの理を知るべきではないか。

かつて漢の高祖が帝位についた理由は、次のとおり。一に帝堯の後裔であった、二に身体容貌が他人と異なつたところが多い、三にすばらしい武力があり祥瑞がくだつた、四に聡明で仁愛にあふれている、五に人物の能力を見抜き、すべてを委ねることができた。そのうえに誠実であり、はかりごとを立てることを好み、他人の意見を聴き取るのがうまく、善いことがらを見ると熱心に追求する、人を使用する場合には自分がその任にあたるかのように心をくだいた。人の諫めにしたがうことは、水の流れにそうように素直であり、チャンスに乗ずるのは、声に応じて響きの起こるようだった。

食事の途中でも口の中のものを外に出して即座に張良の策を受け入れ、洗っていた足の水を払って礼して酈食其の説を取り入れ、兵卒豊敬の進言に感じて長安に都し、四皓の名を尊重して愛妃の子を太子に立てるのを断念し、韓信を陣中において取り立て、楚から逃亡してきた陳平を受け入れた。こうして高祖は帝業を成し上げた。

だから、

英雄は誠に知りて覚悟し、畏るること禍戒の若くし、超然として遠く覽、淵然として深く識り、陵嬰の明分を収め、信布の覬覦を絶ち、逐鹿の譬説を距ぎ、神器の授有るを審かにし、冀ふ可からざるを賣り、二母の笑ふ所と為る無くんば、則ち福祚子孫に流れ、天祿其れ永く終へん。

と論を結んでいる。英雄たる者はこの内実を知り自覚して、災いの起こる戒めとして気をつけ、はるか遠くを見て状況を深く理解して、天下を取ることを平原で鹿を追うことになどとえるような愚かな話に耳を貸すな、陳嬰の母や王陵の母に笑われるようなことさえしなければ、幸福は子孫に伝えられ、神から授けられた福祿もいつまでも久しくまっとうすることができるだろう、と。

道真は「瞥見」「瞥言」「譬辞」といったことばを用いず、自らの愚かな意見を「譬説」をもって表現したのは、『文選』（巻52「論二」）にも収められたこの「王命論」の内容を喚起しようとしたのだろう。基経が天子になるうとしたわけではないが、権力の中枢にある者にとって必要なのは、天命と世の興廢の理を知り、諫言を聴くこと、家の繁栄への自覚など、論の基調となっているのは班彪の「王命論」にひとしい。

